

小倉百人一首 一覧表（歌順・決まり字あり）

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
わびぬれば 今はた同じ 難波なる	難波潟 短きあしの ふしの間も	住の江の 岸による波 よるさへや	ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川	立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる	君がため 春の野に出でて 若菜つむ	陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに	筑波嶺の 峰より落つる 男女の川	天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと	これやこの 行くも帰るも 別れては	花の色は うつりにけりな いたづらに	わが庵は 都のたつみ しかぞ住む	天の原 ふりさけ見れば 春日なる	かささぎの 渡せる橋に おく霜の	奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の	田子の浦に うち出でてみれば 白妙の	あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の	春過ぎて 夏来にけらし 白妙の	秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ
みをつくしても 逢はむとぞ思ふ	逢はでこの世を 過ぐしてよとや	夢の通ひ路 人目よくらむ	からくれなるに 水くくるとは	まつとし聞かば 今帰り来む	わが衣手に 雪は降りつつ	乱れそめにし われならなくに	恋ぞつもりて 淵となりぬる	をとめの姿 しばしとどめむ	人には告げよ 海人の釣舟	知るも知らぬも 逢坂の関	わが身世にふる ながめせしまに	世をうち山と 人はいふなり	三笠の山に 出でし月かも	白きを見れば 夜ぞふけにける	声きく時ぞ 秋は悲しき	富士の高嶺に 雪は降りつつ	長ながし夜を ひとりかも寝む	衣ほすてふ 天の香具山	わが衣手は 露にぬれつつ

小倉百人一首 一覧表（歌順・決まり字あり）

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は	浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど	忘らるる 身をば思はず 誓ひてし	白露に 風の吹きしく 秋の野は	夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを	人はいさ 心も知らず ふるさとは	誰をかも 知る人にせむ 高砂の	ひさかたの 光のどけき 春の日に	山川に 風のかけたる しがらみは	朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに	有明の つれなく見えし 別れより	心あてに 折らばや折らむ 初霜の	山里は 冬ぞ寂しき まさりける	みかの原 わきて流るる 泉川	小倉山 峰のみぢ葉 心あらば	名にし負はば 逢坂山の さねかつら	このたびは 幣も取りあへず 手向山	月見れば ちぢにもものこそ 悲しけれ	吹くからに 秋の草木の しをるれば	今来むと 言ひしばかりに 長月の
ものや思ふと 人の問ふまで	あまりてなどか 人の恋しき	人の命の 惜しくもあるかな	つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける	雲のいづこに 月宿るらむ	花ぞ昔の 香ににほひける	松も昔の 友ならなくに	静ず心なく 花の散るらむ	流れもあへぬ 紅葉なりけり	吉野の里に 降れる白雪	暁ばかり 憂きものはなし	置きまどはせる 白菊の花	人目も草も かれぬと思へば	いつ見きとてか 恋しかるらむ	今ひとたびの みゆき待たなむ	人に知られて くるよしもがな	紅葉の錦 神のまにまに	わが身ひとつの 秋にはあらねど	むべ山風を 嵐と言ふらむ	有明の月を 待ち出でてつるかな

小倉百人一首 一覧表（歌順・決まり字あり）

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
大江山 いく野の道の 遠ければ	やすらはで 寝なましものを 小夜更けて	有馬山 猪名の笹原 風吹けば	めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に	滝の音は 絶えて久しく なりぬれど	忘れじの 行く末までは かたければ	嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は	明けぬれば 暮るるものとは 知りながら	かくとだに えやは伊吹の さしも草	君がため 惜しからざりし 命さへ	みかきもり 衛士のたく火の 夜は燃え	風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ	八重むぐら 茂れる宿の 寂しきに	由良のとを 渡る舟人 かぢを絶え	あはれとも いふべき人は 思ほえて	逢ふことの 絶えてしなくは なかなか	逢ひ見ての 後の心に くらぶれば	契りきな かたみに袖を しぼりつつ	恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり
まだふみも見ず 天の橋立	かたぶくまでの 月を見しかな	いでそよ人を 忘れやはする	雲隠れにし 夜半の月かな	今ひとたびの 逢ふこともがな	名こそ流れて なほ聞こえけれ	今日を限りの 命ともがな	いかに久しき ものとかは知る	なほ恨めしき 朝ぼらけかな	さしも知らじな 燃ゆる思ひを	長くもがなと 思ひけるかな	昼は消えつつ ものをこそ思へ	くだけてものを 思ふころかな	人こそ見えね 秋は来にけり	行く方も知らぬ 恋の道かな	身のいたづらに なりぬべきかな	人をも身をも 恨みざらまし	昔はものを 思はざりけり	末の松山 波越さじとは	人知れずこそ 思ひそめしか

小倉百人一首 一覧表（歌順・決まり字あり）

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
長からむ 心も知らず 黒髪の	秋風に たなびく雲の 絶え間より	淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に	瀬を早み 岩にせかるる 滝川の	わたの原 漕ぎ出でて見れば ひさかたの	契りおきし させもが露を 命にて	憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ	高砂の 尾の上の桜 咲きにけり	音に聞く 高師の浜の あだ波は	夕されば 門田の稲葉 おとづれて	寂しさに 宿を立ち出でて ながむれば	嵐吹く 三室の山の もみぢ葉は	心にも あらで憂き世に ながらへば	春の夜の 夢ばかりなる 手枕に	もろともに あはれと思へ 山桜	恨みわび ほさぬ袖だに あるものを	朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに	今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを	夜をこめて 鳥の空音は はかるとも	いにしへの 奈良の都の 八重桜
乱れて今朝は ものをこそ思へ	もれ出づる月の 影のさやけさ	幾夜寝覚めぬ 須磨の関守	われても末に 逢はむとぞ思ふ	雲居にまがふ 沖つ白波	あはれ今年の 秋もいぬめり	激しかれとは 祈らぬものを	外山の霞 立たずもあらなむ	かけじや袖の ぬれもこそすれ	蘆のまろやに 秋風ぞ吹く	いづこも同じ 秋の夕暮れ	竜田の川の 錦なりけり	恋しかるべき 夜半の月かな	かひなく立たむ 名こそ惜しけれ	花よりほかに 知る人もなし	恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ	あらはれわたる 瀬々の網代木	人づてならで 言ふよしもがな	よに逢坂の 関は許さじ	けふ九重に にほひぬるかな

小倉百人一首 一覧表（歌順・決まり字あり）

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
ももしきや 古き軒端の しのぶにも	人もをし 人も恨めし あぢきなく	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは	来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに	花さそふ 嵐の庭の 雪ならで	おほけなく 憂き世の民に おほふかな	み吉野の 山の秋風 小夜ふけて	世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の	きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに	見せばやな 雄島のあまの 袖だにも	玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば	難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ	村雨の 露もまだひぬ 槇の葉に	嘆けとて 月やは物を 思はする	夜もすがら 物思ふころは 明けやらぬ	長らへば またこのごろや しのばれむ	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る	思ひわび さても命は あるものを	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば
なほあまりある 昔なりけり	世を思ふゆゑに もの思ふ身は	みそぎぞ夏の しるしなりける	焼くや藻塩の 身もこがれつつ	ふりゆくものは わが身なりけり	わが立つ杣に 墨染めの袖	ふるさと寒く 衣打つなり	海人の小舟の 綱手かなしも	人こそ知らね 乾く間もなし	衣片敷き ひとりかも寝む	濡れにぞ濡れし 色はかはらず	忍ぶることの 弱りもぞする	みをつくしてや 恋ひわたるべき	霧立ちのぼる 秋の夕暮れ	かこち顔なる わが涙かな	閨のひまさへ つれなかりけり	憂しと見し世ぞ 今は恋しき	山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる	憂きに堪へぬは 涙なりけり	ただ有明の 月ぞ残れる